



京都大学

# 工学広報



## 「工学広報」Web サイト

本誌 Web 版、諸報、過去号の閲覧が可能です。下記のアドレスからアクセスしてください。



<https://www.t.kyoto-u.ac.jp/publicity>

## 工学部公式 X (旧 Twitter)

是非お気軽にフォローください。



[https://x.com/Eng\\_Kyoto\\_Univ](https://x.com/Eng_Kyoto_Univ)

## 巻頭言

## 変革の時代における「自由な研究」と「知の多様性」

工学研究科長・工学部長 鈴木基史 ..... 1

## 工学研究科・工学部の更なる発展に向けて

前工学研究科長・工学部長 立川康人 ..... 4

## 随想

## 不易流行

名誉教授 乾 晴行 ..... 8

## ニュース

## 「光子のふしぎと光量子センシング」を大阪・関西万博に出展しました

電気電子デジタル理工学専攻 教授 竹内繁樹 ..... 11

## 日本工学教育協会 関西工学教育協会 第73回年次大会開催報告

第73回年次大会実行委員長 蓮尾昌裕 ..... 14

## 2025年度八大学工学部長会議・八大学工学関連研究科長等会議を開催しました

..... 18

「次世代研究者産学連携ネットワークイベント：産学共創で描くレジリエントな社会」開催報告  
— テクノサイエンスヒル桂構想に関わる取組み（令和7年度の活動成果）—

総合研究推進本部 研究プロモート部門 リサーチ・アドミニストレーター 山崎有香 ..... 19

## 工学における国際交流の推進

附属工学基盤教育研究センター 副センター長 教授 本多 充 ..... 21

## 桂図書館、工学北図書室・工学南図書室 令和7年度活動報告

..... 23

## 第21回工学部教育シンポジウム ..... 26

## 令和7年度吉田卒業研究・論文賞 ..... 27

## 令和7年度吉田研究奨励賞 ..... 28

## 令和7年度工学研究科馬詰研究奨励賞 ..... 29

## 令和7年度工学部公開講座・オープンセミナー開催報告 ..... 30

## TOPICS 北川進 理事・副学長、高等研究院特別教授 ノーベル化学賞受賞

## 紹介

## Kyoto iUP 生へインタビュー Vol.12 ..... 32

## 水素乱流燃焼特性の解明を目指して

九州大学大学院総合理工学研究院 甲斐玲央 ..... 33

## 原子から加工までを貫く材料変形研究

助教 宮澤直己 ..... 34

## 建築の設計と研究について

准教授 猪股圭佑 ..... 35

## 「なるほど！」の瞬間に立ち会うよろこび

技術主任 丸岡恵理 ..... 36

## 編集後記

## 変革の時代における「自由な研究」と「知の多様性」

工学研究科長・工学部長 鈴木基史



令和8年4月から工学研究科長・工学部長を拝命いたしました。京都大学が「国際卓越研究大学」の候補として選定され、認定の最終決定に向けた正念場をむかえています。大学そのもののあり方が問われる大きな

変革期にこの重責を担うこととなり、身の引き締まる思いです。私は北村隆行先生、大嶋正裕先生、樫木哲夫先生の三名の歴代の研究科長のもとで、研究科長補佐や副研究科長を務めてまいりました。運営の現場に長く携わったこともあり、研究科長の仕事も概ね理解しているつもりではおりましたが、昨今の激動する社会情勢や大学改革のスピードを鑑みますと、これまでの経験だけでは予測もつかない事態が待ち受けていることは確実であり、正直なところ緊張感も覚えています。

私は1988年に本学大学院物理工学専攻（当時）修士課程を修了した後、株式会社豊田中央研究所に入社し、14年間にわたり企業研究者として過ごしました。比較的長い企業経験のある研究科長は珍しいかもしれません。2002年に機械物理工学専攻（当時）の助教授として本学へ戻り、今日に至るまで教育・研究に従事してまいりました。豊田中央研究所はトヨタグループの共同出資によってトヨタグループの視点での基礎研究を目的に設立された研究所です。基礎研究とはいっても、社会実装という明確な出口は必要ですし、それなりにスピード感も求められます。当然ながら会社の経営方針や事業戦略の変更により、情熱を注いでいた研究テーマを志半ばで中止させられるという厳しさも

経験いたしました。大学に着任後、当時所属した研究室の木村健二教授から「自由にやってよい」と背中を押されたものの、当初はやりたいことはあっても独自の実験装置もなく、既存の実験装置で思いつく研究は教授の研究の焼き直しばかりで、どうすれば独自の研究を始められるか苦しんだ時期もありました。幸い、着任翌年の2003年から機械系専攻で実施された21世紀COEプログラム「動的機能機械システムの数理モデルと設計論」から若手研究助成をいただいたことを契機に、独自の実験装置を立ち上げ、そこから得られた新たな知見を論文や競争的資金の獲得へと繋げていくことができました。誰かから「この研究はこれまで」と強制されることなく、自らの知的好奇心に基づいてテーマを決め、納得がいくまで真理を探究し続けられることは、何にも代えがたい幸せです。企業経験があるからこそ身をもって実感した「自由な研究」ができる環境のすばらしさこそ、守り抜くべき本質であると信じています。

また、21世紀COEプログラムでの経験は、私の視野を大きく広げてくれる好機ともなりました。当時、この拠点は機械系と複雑系の研究者を、専攻や研究科の枠を超えて「複雑系の数理解析」「複雑流体现象の解明とそのモデリング」「複雑構造材料の特性解析」「複雑系の制御・設計論」の4つのグループに分け、活発な議論を行っていました。その際、数百ページからなる拠点全体の年次報告書の編集委員長を任されたことは、学内に知り合いの少なかった私にとって、短期間で異分野の研究者と交流する絶好の機会となりました。そして自身が所属する「複雑構造材料の特性解析」グループ内での連携はもとより、「複雑流体现象の解明とそのモデリング」や「複雑系の制御・設計論」グ

ループの研究者とも共同研究を立ち上げることができました。この経験によって異分野の研究者と交流することの面白さを知り、その後COIプログラム「活力ある生涯のためのLast 5X イノベーション拠点」、エジプト日本科学技術大学 (E-JUST)、高校生のための体験型科学講座「ELCAS」などの活動を通じて、学系や研究科を超えてさらに広い分野の研究者と交わることで、私の守備範囲外の研究や分野によるアプローチの違いなど多くのことを学びました。このような活動を通じて自身の専門分野に閉じこもっていた時には見えなかった「知の多様性」がいかに強力なポテンシャルを持っているかを肌身で感じました。

工学部・工学研究科におけるこれまでの取り組みを振り返りますと、立川康人前研究科長の期間に新たな総合知の修得と実践を基盤とした次世代を担う研究者の育成を目的として「次世代学際院」が設置されました。学際院長の横峯健彦教授をはじめ運営に携わる先生方の導きもあり、昨年度は40名近い若手研究者が所属し、若手主導のセミナーが複数回開催されました。設置から3年間の活動を通じて学系を超えた若手研究者同士の学際研究が開始され、その成果が共著論文として出版されるなど、研究を通じた異分野交流が順調に進んでいます。次世代学際院は、発足当初より参加する研究者や職員の献身的な努力により運営されてきましたが、その活動規模を拡大すれば、必然的にエフォートの逼迫が課題となります。若手研究者の自立と融合を実質化するためには、本院の活動に対するサポートの強化が必要だと考えます。

一方、工学研究科には融合工学コースとそれに関連する高等教育院が設置されており、専攻の枠を超えながら共通の学問領域において広い視野を持つ学生や若手を育成する土壌も整備されています。また、工学基盤教育研究センターの先生の努力により、起業精神やプロジェクトマネジメントの能力を育むすばらしい授

業も提供されています。残念ながらこのような、これまでの工学部・工学研究科の取り組みの中には、その開始から長い年月を経て設立当初の理念や目的を理解している教職員が少なくなり、必ずしもその機能を十分に果たすことができていないものもあるかと思えます。国際卓越研究大学として京都大学が目指す「研究改革」「教育改革」「グローバル戦略」「多様性の確保」「社会発信」「成長戦略」「経営改革」を実現するために、新しい取り組みを開始するばかりではなく、従来の取り組みを再定義して有効に活用することが、スピード感をもった改革の推進には必要だと考えます。

正直に申し上げれば、本稿を執筆しているのは国際卓越研究大学の認定候補としての選定が発表されてからおおよそ1ヶ月後です。アドバイザーボードからの指摘があったこともあり、現在、学内の関心は部門制の導入に集中していると思われます。部門制のねらいは、私がかつてCOEプログラムで体験したような、大きな研究グループを単位とする教育研究活動を、より大規模かつ恒常的なシステムとして実装することにあります。令和8年度より設置される、電気系2専攻を統合した「電気電子デジタル理工学専攻」と、化学系6専攻を統合した「化学理工学専攻」はまさにその先駆けとなるすばらしい取り組みであり、両専攻はこの改組を基にして部門制を構築していくことでしょう。この取り組みを参考にしながら、後に続く専攻も部門制の整備を進めていくことになると思います。今後は、各専攻・部門制が主体性をもって教育・研究の方針を構築していく一方で、環境安全、情報環境、建物・設備の維持管理など、インフラに関する多くの事柄は、工学研究科全体で取り組むべき課題となります。同時に、「部門制を統括するチェア・パーソンが部門制の将来構想・研究戦略を策定し、研究力強化を図る」ことが、個々の研究者の自由な研究を奪うことにつながる仕組みも必要だと感じます。真に社

会を変革するイノベーションは、既存の延長線上ではなく、研究者が自由な発想で極めた「知」の深淵からこそ生まれるものだからです。重要なのは、個々の研究者が最大限に創造性を発揮できる環境を戦略的に整備し、そこで生まれた知を社会価値へと繋げるための仕組みを整えることだと考えます。

京都大学には、大学改革の進捗に関わらず、毎年新しい学生が入学し、巣立っていきます。研究者が取り組む自由な研究の歩みを緩めることも許されませんし、技術職員や事務職員の皆さんにもこれまでの延長線にはない新しい業務を担当いただくことになるかもしれません。研究科長として、日々進行する教育・研究の質を堅持した上で、各専攻・学系・デパートメントと協力してより良い環境の構築を目指していきたいと思えます。皆様のご支援とご協力を心よりお願い申し上げます。

(マイクロエンジニアリング専攻 教授)



## 工学研究科・工学部の更なる発展に向けて

前工学研究科長・工学部長 立川 康人



工学研究科長・工学部長を三年間、務めさせていただきました。この三年間、教職員の皆様とともに工学研究科・工学部のよりよい方向を目指して様々なことに取り組む機会を頂きました。あつという間の三年間

でした。楽しく充実した日々を過ごすことができましたことを心より感謝申し上げます。国際卓越研究大学の認定・認可、さらにその先に向けて工学研究科がよいスタートを切る体制になりつつあることをとてもありがたいと思います。今後に向けて、工学研究科・工学部が発展していく方向性について考えてみたいと思います。

### 三年目に行ったこと

研究科長の三年間、工学部や工学研究科全体に関連する教育システムを部分的に変えることは容易ではなく、学部から博士後期課程までの一連の教育システムとして議論することの重要性を痛感しました。三年間、拡大学科長懇談会を定例で開催して工学全体の教育の方向性を議論して参りましたが、三年目は特に、博士後期課程進学者を増やすための仕組みに焦点を当てて議論を深めました。背景には国大協の提言（令和7年3月）や京大の国際卓越研究大学の研究等体制強化計画で掲げている博士学位取得者数3倍増がありました。これまでも工学研究科では連携プログラム（高度工学コース及び融合工学コース）による5年一貫の教育プログラムの設置や博士学位取得後のロールモデルの紹介等を実施して博士後期課程への進学者を増やす取り組みを行ってきました。また、我々だけでなく八大学工学系連合会や文部科学省、経

済産業省による様々な取り組み、経団連による提言（令和6年2月）など、国を挙げた取り組みが実施されてきました。しかし現状は日本の工学系大学院全体で、博士学位授与者数は修士学位授与者数の1割程度にすぎません。理学研究科と農学研究科の博士学位取得者数は修士課程学位取得者数の2割程度あり、医薬保健系の博士学位取得者数は修士学位取得者数の1.3倍あります。工学系の博士学位取得者の比率が少ないことは京大を含めて日本の工学系大学院に共通の特徴です。

京大工学部では、優秀な女性学生の入学増を目的として令和8年度入試から特色入試に女性募集枠を設けました。工学系の博士後期課程進学者と女性学生が少ないことは、背景は異なるものの日本の社会が影響していることは間違いなく、女性募集枠と同様に博士後期課程進学者を促す何らかの仕組みを導入しないと、この状況を変えることは難しいと考えました。そこで、蓮尾昌裕副研究科長（機械理工学専攻教授）とともに議論の進め方を考え、全学の教育改革戦略本部で議論されている情報を共有しつつ、学部から大学院までを含めた教育制度の将来を拡大学科長懇談会で議論しました。議論のポイントは以下の様でした。

- 学部から大学院博士後期課程までの一連の流れの中で、無理のない期間短縮によって、博士後期課程に優秀な学生の進学を促す仕組みを考える。
- その一環として学部の要卒単位を減らし、その分、修士課程の科目を学部で受講できるようにして、それらの修得単位を修士課程の修了単位として認める。所属する学科と異なる専攻の科目受講も認め、専門の異なる他専攻にも進学する道を拓く。
- 修士課程では入学当初から研究活動に着手し研究時間を大半とする。修士課程の早期修了を可能とするとともに、研究の魅力を伝えて博士後期課程

への進学を促す。優秀な学生は期間を短縮して博士学位を認定し、早期にポスドクとして雇用する。

これらの工夫により、優秀な学生は最短7年で博士学位の取得が可能な仕組みについて議論を進めてきました。これが実現すれば現行の学部・修士を合わせて6年間よりも1年増えるだけで博士學位取得が可能となります。現状でもこうした期間短縮は可能ですが、多くの学生に博士課程進学を促すためには学部教育の改革と合わせて進める必要があると考えます。10年先に博士學位を取得する学生は来年学部に入學する学生です。ゆっくりと構えているわけにはいきません。20年先には18歳人口が70万人を切り、今の60%程度となります。高い研究レベルを維持するためには博士後期課程進学者を増やすしかありません。拡大学科長懇談会の議論をまとめて報告書を作成しました。次年度以降の議論の参考としていただき、工学の明るい未来を築いていただきたいと思います。

#### 工学研究科における国際卓越研究大学の実現に向けて

工学研究科では令和8年度から電気電子デジタル理工学専攻と化学理工学専攻が設置されます。地球系専攻でも令和9年度からの一専攻化に向けて準備が進められています。一専攻化の動きは、必ずしもデパートメント構想のもとで進められたわけではなく、それぞれの専攻の将来を考えた独自の取り組みとして実施されたものですが、結果としてデパートメント制に移行しやすい体制ができつつあります。デパートメント制はそれぞれのデパートメントの独自性をより発揮して研究力を高めるための柔軟な教育研究活動を可能とし、大講座制の実質化を進める有効な手段として機能すると思います。一方で、工学研究科がまとまって運営することで効果を高める仕組みは、デパートメント制導入後も維持されるように組織を整えることが大事だと思います。その一つが、次世代学際院です。この三年間、横峯健彦副研究科長（原子核工学専攻教授）に院長をお願いしました。異なる専攻に所属する41

名の若手研究者による活発な異分野交流が実現しており、ここで芽生えた共同研究による成果が国際学術誌に掲載されるまでになっています。工学研究科内の異分野交流だけでなく他部局との交流も始まりました。工学基盤教育研究センターや桂インテックセンターなどの附属センターも工学研究科の共通基盤としてなくてはならない教育研究組織です。これらの共通基盤組織を工学研究科共通のコア組織としてデパートメント制のもとに位置付けることが重要です。

国際卓越研究大学として魅力あるコアファシリティを桂地区に置くことも必須です。コアファシリティ構想は桂キャンパス将来構想と必然的に連動します。具体的な構想を描くためにコアファシリティ構想は安部武志副研究科長（化学理工学専攻教授）と横峯副研究科長にお願いし、桂キャンパス将来構想は小椋大輔副研究科長（建築学専攻教授）に検討をお願いしました。桂地区のコアファシリティとして企業中央研究所機能を桂キャンパスに実現し、共同研究の実質化、研究成果の社会実装によるイノベーションの促進、企業・大学の若手研究者・技術者のコンカレント育成を目的とする具体的な構想を立案するに到りました。また、確保すべき研究スペースについて具体的な検討を進め、建物整備計画について研究棟建設候補地とフロア構成の原案を作成することができました。研究棟が完成するまで研究設備の導入を待つわけにはいきませんので、必要な機器の候補と一時的な設置スペースについても検討を進めました。基本的な検討は終了しており、具体的な計画策定が開始されることが楽しみです。

デパートメント制に移行するに当たって、桂地区事務部の業務とデパートメントオフィスの業務とを調整し、デパートメントオフィスを具体化していくことが今年の最重要課題となります。デパートメントの独自性をより発揮して効果を高める業務と工学研究科の共通事項として実施することで事務効率を高める業務とを切り分けて、デパートメント制をうまく導入する必要があります。工学研究科執行部では桂地区での事務体制の具体

的なイメージを構想し、本部に設置されたデパートメントオフィス検討 WG で適切な事務体制の検討が進むように安部副研究科長と高橋良和副研究科長（社会基盤工学専攻教授）にこの WG での議論をお願いしました。阪本卓也副研究科長（電気電子デジタル理工学専攻教授）には広報担当としてホームページや広報冊子の見直し、公開講座の企画をお願いしました。デパートメント制導入後、工学研究科・工学部全体の広報体制は一層重要となり、ここでも桂地区事務部とデパートメントオフィスでの業務の調整が必要となると考えます。

### 100 年先の工学研究科・工学部に思いを馳せる

工学に関する教育研究は多岐に渡りますが、どの分野も科学的知見をもとに我々の生活の利便性を高める技術を追求し、実社会に活用して安全で健康な質の高い社会を構築することを目的とします。技術開発を通して持続可能な社会の実現に貢献する学術が工学です。令和 7 年 8 月に琵琶湖疎水の諸施設が国宝・重要文化財に指定されたというニュースに接して、明治中期の工学技術が今に至る持続可能な社会を築いていることに感銘を受けました。

琵琶湖疎水を設計し施工にあたったのは、東京大学工学部の前身の一つである工部大学校で学んだ田邊朔郎博士です。彼は工部大学校を卒業後、京都府に着任してこの事業に関わりました。その後、帝国大学教授に就任するとともに我が国のインフラ整備に従事します。明治 33 年（1900 年）には京都帝国大学理工科大学教授となり、大正 5 年（1916 年）には第 2 代目の京都帝国大学工科大学長（現在の工学部長）を務められました。琵琶湖疎水を通して供給される水資源は都市用水および発電を中心に今も利用されています。琵琶湖疎水は京都市街地の景観に溶け込み良好な環境を構成する重要な要素にもなっています。技術が未来を拓き、今も利用されて持続可能な社会を実現し、さらに国宝・重要文化財に指定されたことに心を打たれます。

蹴上にあるインクラインのすぐ近くに琵琶湖疎水記

念館があり、そこに通じる疎水分水の放流口の上に「夢之年百楽」（見た通り左から記載）という扁額が掲げられています。田邊朔郎とともに琵琶湖疎水の建設を推進した当時の京都府知事の北垣国道が百年先の京都を思って読んだものだそうです。吉田キャンパス本部構内にある旧土木工学教室の中庭には、田邊朔郎が植樹したとされるヒマラヤ杉があります。杉の横には石標が置かれていて「田邊朔郎寄・大正元年 ヒマラヤ」と記載されています。100 年以上、吉田キャンパスで生きてきた「田邊杉」は 4 階建ての校舎を大きく超える巨木となって京大工学の歴史を物語っているようです。年月の経過とともに科学技術は次々と新しいものに置き換わっていきませんが、京大工学の理念と目標には変わることのない普遍的な内容があります。国際卓越研究大学は 25 年先を目標に研究組織や教育プログラムの改革を掲げています。それを進める中で時代を超えて発展する 100 年先の京大工学の姿にも思いを馳せ、どうありたいかを考えたいと思います。

新たな研究科長・執行部のもとで工学研究科・工学部が一層発展していきますよう、引き続き教職員の皆様の一層の協力をよろしくお願い申し上げます。

（社会基盤工学専攻 教授）



吉田キャンパス総合研究 14 号館（旧土木工学教室本館）の中庭にある田邊杉

濱中裕之部長をはじめ、桂地区（工学研究科）事務部・技術室の皆様は工学研究科・工学部の運営が支えられています。令和5～7年度の執行部体制は以下のとおりでした。

#### ○研究科長・工学部長・教育研究評議会評議員

立川康人（社会基盤工学専攻）全般，組織改革 WG 主査

#### ○副研究科長・教育研究評議会評議員

蓮尾昌裕（機械理工学専攻）教育担当，教育改革 WG 主査（令和6～7年度）

岸田 潔（都市社会工学専攻）教育担当，教育改革 WG 主査（令和5年度）

安部武志（物質エネルギー化学専攻）研究担当，コアファシリティ構想 WG 主査（令和7年度）

横峯健彦（原子核工学専攻）研究担当，次世代学際院長，技術部長（令和5～6年度）

#### ○副研究科長

高橋良和（社会基盤工学専攻）学生担当（令和5～7年度）

小椋大輔（建築学専攻）評価・財務・施設・男女共同参画担当，桂キャンパス構想 WG 主査（令和5～7年度）

横峯健彦（原子核工学専攻）国際担当，工学基盤教育研究センター長，次世代学際院長（令和7年度）

阪本卓也（電気工学専攻）研究倫理・研究公正・図書・広報・情報担当（令和7年度）

川上養一（電子工学専攻）研究倫理・研究公正・図書・広報・情報担当（令和5～6年度）

安部武志（物質エネルギー化学専攻）国際担当，工学基盤教育研究センター長，コアファシリティ構想 WG 主査（令和5～6年度）

#### ○桂地区事務部

事務部長 濱中裕之（令和7年度），  
梶村正治（令和5～6年度）

総務課長 服部和枝（令和7年度），  
大野広道（令和5～6年度）

管理課長 芳倉清紀（令和7年度），  
松井芳樹（令和6～7年度），  
馬場 勉（令和5年度）

経理課長 白神照広（令和7年度），  
道上吾朗（令和5～7年度）

教務課長 廣瀬泰子（令和5～7年度）

学術協力課長 中川憲一（令和6～7年度），  
南口敬司（令和5年度）

#### ○工学研究科技術室

技術室長 日名田良一（令和7年度）  
山路伊和夫（令和5～6年度）



## 不易流行

名誉教授 乾 晴 行



定年退職を迎えるにあたり「工学広報」に寄稿させていただく機会を得ました。これまで私の研究・教育活動を支えてくださった恩師、数多くの共同研究者、研究室のスタッフ・卒業生、また何より家族に感謝の気

持ちを伝える良い機会ともなりますので、これまでの歩みを振り返り、雑感を述べてみたいと思います。

大阪大学大学院工学研究科の藤田廣志教授が主宰される研究室で研究者として歩み始めました。結晶の塑性変形を記述する「転位論」の講義で憧れ、学部から博士後期課程修了までお世話になりました。藤田廣志教授は「転位論」だけでなく、原子サイズの結晶欠陥である転位を観察するための電子顕微鏡法の大家でもあり、結晶の変形を原子の動きに遡って実験研究する基礎を教授いただきました。退職するこの日まで大切にしてきた実験研究発想のベースとなりました。大学院生の頃、原子が解像できる透過電子顕微鏡が市販されるようになり、興奮・感動とともに原子像を撮影していた当時を懐かしく思い出します。まだ、原子像を拡大観察するモニターのない時代でしたので、顕微鏡の乾板を覗き込んで肉眼で原子像を確認する必要があり、毎晩深夜過ぎに精神統一をして実験していたことを昨日のここのように覚えています。昭和 63 年工学博士を取得し、米国ペンシルバニア大学で博士研究員として金属間化合物の結晶塑性に関する研究に従事することになります。金属間化合物はジェット・エンジン部材など新たな高温構造材料として世界的に注目されつつあった材料です。転位のアトミスティック・シミュレーションの世界的一人者 Vaclav Vitek 教授と

実験研究を行う David Pope 教授が、共に金属間化合物の結晶塑性を研究されていました。Ni<sub>3</sub>Al はジェット・エンジンのタービン翼 Ni 基超合金の主要構成金属間化合物相で、普通の金属材料とは正反対に、温度上昇とともに強度が増大する「異常強化現象」を示すことで知られていますが、そのメカニズムは十分に解明されていませんでした。Vitek 教授がこの実験から明らかになった「異常強化現象」を説明する理論を世界に先駆けて提唱し、その結晶方位依存性など詳細を Pope 教授が実験検証し、系統的な理解が確立されました。このように、理論計算と実験の研究者が如何に刺激しあい、その先の研究へのインスピレーションを生み出すことができるのか、その過程を間近で見せていただく幸運にも恵まれました。また、在籍したペンシルバニア大学の LRSM (Laboratory for Research on the Structure of Matters) 研究所は、金属材料のみならずセラミックス、半導体、高分子など広範囲の材料を扱う研究所で、毎日午後 3 時から講堂でコーヒープレークがあり、異分野の研究者とも自由に交流が持て新たな刺激を受けることも多々ありました。現在、世界の一線で活躍する Greg Rohrer 教授 (カーネギーメロン大学)、Linda Schadler 教授 (ベルモント大学) など、当時知り合った多くの研究者と今でも交流が続いており、至宝の時間を過ごすことができました。

平成元年に帰国し、京都大学に奉職しました。山口正治教授のもとで金属間化合物の結晶塑性に関する研究を続けることになりました。山口正治教授は、金属間化合物構造材料研究の世界的権威で、海外からも多くの研究者が集まり、研究室は国際色豊かな金属間化合物研究の一大拠点でした。自分で研究室を主宰するようになった後も金属間化合物研究の一大拠点としての研究室を維持するよう努めました。山口正治教授の

もとでは、当初、Ni基超合金を代替する軽量高温構造材料としてのTiAl基金属間化合物が主要研究トピックでした。結晶塑性の方位依存性を調べるため単結晶を必要としましたが、単結晶成長装置の前でモニターを見ながら融液の量を一定に保つ必要があり、単結晶1本得るのに十数時間を要しました。今日では学生に与えるテーマとしてはブラックと言われ不適切なものかも知れませんが、当時の多くの学生諸君の頑張りにより多くの業績を積むことができ、研究室をTiAl基金属間化合物研究の最先端研究室にまで押し上げることが出来ました。

平成16年に研究室を主宰するようになってからは、金属間化合物研究を更に発展させるためナノ・ミクロンサイズの微小体積の結晶塑性の研究にも着手し、全く塑性を示すことがないと考えられていた多くの脆性金属間化合物、セラミックスの変形機構の解明に成功しました。微小体積の力学特性評価の精密測定が可能となったのは幾度にもわたる試験機の改良の賜物で、従事していただいた研究室スタッフや卒業生には頭が下がる思いです。平成30年には科学研究費新学術領域研究「ハイエントロピー合金」の領域代表として採択いただき、国内外から多くの研究者を迎え、構造材料としての金属材料研究の拠点の役割を果たせたことは幸いなことでした。定年を迎えるにあたりこれまでを振り返れば、恩師、数多くの共同研究者、研究室のスタッフ・卒業生との幸運な出会いがあったことが今更ながら実感できます。この方々との出会いがなければ今日を迎えることはできなかったと思います。深く感謝申し上げます。

政治の世界でも政権の枠組が変わったように、いろいろなものは常に変化しています。その変化の速度は年々指数関数的に増加し、コロナ禍の収束以降は特に顕著になっているように思います。私も、体を動かすことが昔は億劫でしたが、コロナ禍の収束以降は、鴨川の川岸を歩いて帰ることが普通になりました。歩き始めた当初は良く知られる「鴨川等間隔の法則」に従っ

てカップルが佇むのを良く見かけました。しかし、昨今は訪日外国人がわんさか押しかけ、ビールを飲んでごみを撒き散らかしてどんちゃん騒ぎ、水着で遊泳を楽しむなど、日本人のカップルを見ることは殆どなくなり、「鴨川等間隔の法則」は完全に破綻・崩壊しています。800年以上前、鴨長明が「方丈記」の冒頭「ゆく川の」の一節で世の移ろいやすさ・無常観を川の流に例えて表現しました。「世の中の人々の運命や住まいは、行く川を流れている水が同じではないように常に変化し同じであることは出来ない」と。この一節の「行く川」は鴨川を詠んだものではないでしょうが、「鴨川等間隔の法則」の破綻・崩壊は正にその通りとの感を抱かずにいられません。大学を取り巻く環境も大きな変化の波に飲み込まれているように思います。これまでの学術体系にとらわれない新学部創設など大きな変化・変革が諸大学で実行されつつあります。ファンドによる大学経営など変化・変革の例を挙げればきりがありません。京都大学でもデパートメント制の導入など新たな変化の試みがなされつつあります。私の所属する専攻の教員の専門分野もここ数年、大きく変化したように思います。もともと金属系の専攻・教室でしたが、金属学を専門とする研究グループはもう2、3グループしかありません。変化の常、時代の流れなのかも知れません。学術雑誌や国際会議でも機械学習、AI（人工知能）などを駆使した材料開発に関する研究発表が増加傾向にあります。米国、中国の研究者に顕著な傾向があります。日本ではこの傾向はまだそれ程顕著でないように見受けられますが、それを喜ぶべきか、憂うべきか判断しかねます。国際会議でそのような発表に対して材料基礎の観点から質問しても質疑応答は噛み合いません。勿論、研究の観点が違いますので当然のことではあります。新しい学問体系ですから大切にしないといけないと思いますが、基礎学問の体系から言えば少し憂うところがあるかも知れません。個々の学問もそれらを系統化した学問体系も当然変化しています。AIなどを取り入れた研究発表が

---

できるレベルにまで新たに勉強しなくても良いタイミングで退職できることは、正直幸いだったと思います。京都はしばしば「伝統が息づく街」と形容されます。変わり続けることで変わらないもの、すなわち伝統を守ってきたと言えるでしょう。京都大学もそのようにして発展してきたように思われます。古いものを大切にしながら、新しいものも大事に極めていくことが肝要なのでしょう。古いものを知らずに新しいものを追い求める研究者も大勢います。それを一瞬でも嘆かわしいと思うのは老婆心なのでしょう。若い研究者たちのエネルギーと創造性に期待したいと思います。工学研究科の益々の発展をお祈りして、筆を置くことにいたします。

(材料工学専攻 2026年3月退職)



## 「光子のふしぎと光量子センシング」を大阪・関西万博に出展しました

電気電子デジタル理工学専攻 教授 竹内 繁 樹

### ■ 万博での量子展示に工学研究科を中心に出席

2025年8月14日から20日の7日間、大阪・関西万博のEXPOメッセ「WASSE」を会場として開催された内閣府・文部科学省主催の展示会「エンタングル・モーメント」に、工学研究科を中心とした京都大学万博量子展示チームは、「光子のふしぎと光（ひかり）量子センシング」と題して出展しました。光子の量子的性質や光量子センシング技術を、今回のために特別に製作した実験装置を用いて紹介し、会期中に約3万人にご覧いただきました。本稿では、展示企画の背景、準備の過程、会期中の様子、そして本展示を通じて得られた知見について報告します。なお、登場する方の役職名は、当時のものです。

### ■ 文部科学省からの依頼と京都大学万博量子展示チームの結成

2025年は、ハイゼンベルクによる量子力学の誕生から100年となる節目の年であり、国連はこれを記念して2025年を「国際量子科学技術年」と決めました。この国際的な取り組みに呼応した万博での量子展示企画について、文部科学省より最初に伺ったのは2023年6月のことでした。当初は、全体で会議室規模の展示の一角に、小型の実験装置をお貸し出しする程度を想定していましたが、約1か月後のオンライン会議にて、展示スペースとして全体で約2,000 m<sup>2</sup>が確保され、そのうち100～150 m<sup>2</sup>の展示協力の検討を依頼されました。大規模な展示となることに驚くとともに、研究室単独での対応は困難であると判断しました。

2020年度まで副研究科長を務めていたご縁で、KURA（現・総合研究推進本部）の大西将徳氏が日

本科学未来館に所属されていたことを知っていましたので、KURAの大嶋正裕部門長にご支援をお願いしたところ、ご快諾いただきました。さらに立川康人工学研究科長からも、研究科として全面的に協力いただけることになりました。その後、成長戦略本部、京都大学総合博物館、島津製作所、santec Holdingsなど、多くの学内外の組織からのご支援を得ることができました。

2024年3月には、大西氏の紹介によりキュレーターの今泉真緒氏を迎え、関係者からなる「京都大学万博量子展示チーム」が一堂に会するキックオフ会議を開催しました。展示コンセプトは「本物の量子もつれを見て、感じていただく」とし、2022年ノーベル物理学賞の対象となった「量子もつれの検証実験」を実演するという世界的にも極めて希な展示を含む、計5台の装置を中心とした展示計画を策定しました。

### ■ 展示に向けた課題と克服

量子もつれの実験は、本来、温度・湿度・振動が厳密に管理された実験室環境で行われます。万博会場のような一般展示空間で実験を成立させることは大きな挑戦でしたが、岡本亮准教授、衛藤雄二郎准教授、向井佑助教を中心とする研究室スタッフと学生有志が、多くの困難を乗り越えて装置を完成させました。また彼らは、仮設暗室での緊急メンテナンスなど、会期中も、装置の安定稼働のための努力を続けました。

また万博には子どもから高齢の方まで幅広い年代の来場者が訪れます。専門性の高い内容を分かりやすく伝えるため、今泉氏に加え、日本科学未来館の「インターネット物理モデル」で知られる島田卓也氏、朴鈴子氏らキュレーターチームが展示デザインを担当しま

した。多彩な専門家が結集し、本学出身のノーベル物理学賞受賞者・朝永振一郎先生のエッセイ「光子の裁判」をもとに創作したキャラクター「ミツコ」が展示案内役を務めるアニメーションやインタラクティブな什器などの展示を実現しました。

さらに、会期中は、朝10時から夜20時までの長時



キャラクター「ミツコ」と会場で展示されたグラフィック

間にわたり、来場者対応が必要でした。研究室スタッフは装置の設置・撤収やメンテナンスに専念する必要があり、それ以外に展示運営には延べ60名を超えるスタッフ体制が求められました。この課題は、取りまとめたいただいた芳倉清紀桂地区（工学研究科）学術協力課課長補佐をはじめとする事務部の皆様、成長戦略本部、総合研究推進本部の皆様の多大なご協力により解決することができました。また、事前および会期中の広報においては、桂地区（工学研究科）総務課、本部国際広報室、総合研究推進本部の多大な支援を受け、幸いにも新聞各紙をはじめとする各種メディアでもご紹介いただきました。

#### ■ 展示を通じて得られた学びと今後の展望

開場前には、来場者数が少ないのではとの心配もありましたが、広報のおかげもあり、幸いにも、初日から予想を大きく上回る来場者が訪れ、最終日までに28,985名のご来訪をいただきました。また、来場者のアンケートでも、多数の好評の声を頂きました。

今回の展示を通じ、科学展示にはキュレーターを



万博出展初日スタッフの集合写真

はじめ多くの専門家の知恵と努力が込められていることを実感しました。また、研究者の想いやビジョンを、一般の方々や異分野の方々と共有する場として、科学展示が果たす役割の大きさを強く感じました。学生にとっても、量子のおもしろさを一般の方に分かりやすく伝える、貴重な機会となりました。

展示で使用したアニメーションや装置の動画は、京都大学万博量子展示ホームページおよび京都大学「知の森」動画サイトで公開しています。また、アンケート等での多数の要望をふまえ、学内外での再展示の機会も検討したいと考えています。

最後に、島津製作所、santec Holdings、また京都大学の総合研究推進本部、成長戦略本部、桂地区（工学研究科）事務部をはじめとする学内外の関係者の皆様、そして京都大学万博量子展示チーム各位のご尽力に心より感謝申し上げます。



「量子もつれの検証実験装置」を来場者に説明する竹内繁樹先生

#### ■ 展示運営スタッフとして参加して（桂地区（工学研究科）総務課・掛員）

展示運営スタッフとして、展示最終日の8月20日に参加しました。来場者はご両親と手をつないだ小さなお子さんから、竹内研究室の学生とその場で議論するご年配の方まで多様だったことが印象的で、ピーク時には入場制限を設けるほどの人が集まっており、ご案内するだけで精一杯でした。また、竹内先生自ら、展示機器についてご紹介くださっているときには、来場者の多くが足を止め、関心を寄せていました。聞こえてくる会話も「ミツコちゃんかわいいね!」「光子センサー技術の今後の展望は…」など幅広く、来場者の持っている知識に沿った楽しみ方で学んでくださっていたように感じられました。

日本での万博開催は55年ぶりです。次回は未定です。こうした貴重な機会にスタッフとして関わり、来場者が新たな発見を得る機会の一助となれる素晴らしい経験をさせていただきました。

京都大学万博量子展示ホームページ 光子のふしぎと  
光子センサー  
<https://photonensing.org/kuexpo/about.html>



竹内繁樹先生「光子のふしぎと光子センサー」  
京大知の森（令和7年度秋季）  
<https://www.channel.pr.kyoto-u.ac.jp/video/40139>



本展示は、文部科学省 Q-LEAP「量子もつれ光子対を利用した量子計測デバイスの研究」ならびに JST-ERATO「竹内超量子もつれ」プロジェクトのアウトリーチ活動として実施しました。



様々な表情のキャラクター「ミツコ」

## 日本工学教育協会 関西工学教育協会 第73回年次大会開催報告

第73回年次大会実行委員長 蓮尾昌裕

日本工学教育協会と関西工学教育協会の共催のもと、日本工学教育協会第73回年次大会が京都大学桂キャンパス（船井哲良記念講堂およびC3棟）において令和7年8月27日～29日の3日間で開催された。大会では500名弱の工学教育を研究する参加者が集い、熱心な発表と討議が行われた。関西地区での開催は9年ぶり、京都大学では30年以上開催されておらず、当然ながら桂キャンパスでは初めての開催となった。本稿では本大会の準備から実施までにおける活動を報告する。

### 開催まで

令和6年春段階で第73回年次大会が京都大学で開催されることが決まっており、第72回年次大会の見学と引継ぎのため、令和6年9月4日に立川研究科長、大野総務課長、服部総務課長補佐と蓮尾で九州大学伊都キャンパスに行った。日本工学教育協会は昭和27年に設立された工学教育に関する調査研究とその成果の普及・推進等を行う由緒ある学会である。文部科学大臣賞をはじめとする工学教育賞の授与も行われる。引継ぎの際には参加者一同、来年の京都大学での年次大会を成功裏に行うべき緊張感と責任感に包まれた。

また、年次大会では開催校が中心となって大会メインテーマを設定し、特別企画とシンポジウムも企画することになっている。立川研究科長／関西工学教育協会会長を中心として工学研究科執行部と関西工学教育協会で大会メインテーマや各種企画を立案しつつ、令和7年6月には実行委員会を立ち上げ、総務課／関西工学教育協会事務局との連携のもと開催準備を進めた。

### 大会メインテーマ

#### 総合知を育む工学教育

（趣旨）工学は地球社会に役立つ技術開発を目的とする。最先端の科学技術を追求するだけでなく、人の心や環境、安全性、社会性、経済性、持続可能性を重視し、科学技術を人や社会に役立てて、目の前の課題に対処することが工学の目的である。そのためには、専門分野に関連する自然科学に加えて、人文科学や社会科学にも関心を持ち、それらの知識を用いて自ら課題を見出し解決する力を育む教育が欠かせない。そこで、今大会のメインテーマを「総合知を育む工学教育」とし、専門知を広げ総合知を育み活用するために工学系大学・高専のリベラルアーツ教育から専門教育、リカレント教育にわたる工学教育の新たな展開について議論する。

### 大会報告

#### ○開会式

日本工学教育協会会長の岩附信行氏と関西工学教育協会会長・本大会委員長／京都大学工学研究科研究科長・教授の立川康人氏から開会挨拶があった。続いてあべ俊子文部科学大臣からの祝辞が松本英登文部科学省高等教育局専門教育課長により代読された。



立川康人関西工学教育協会会長・本大会委員長／京都大学工学研究科研究科長の開会挨拶の様子



岩附信行日本工学教育協会会長の開会挨拶の様子

### ○表彰式

文部科学大臣（代理）、経済産業省イノベーション・環境局長（代理）、岩附日本工学教育協会長から、それぞれ文部科学大臣賞、経済産業省イノベーション・環境局長賞、工学教育賞の賞状が受賞者に授与された。京都大学工学部からは、学部教育における土木工学分野の国際コースプログラムが、土木技術を学んだ国際的リーダー育成に長年にわたって取り組み、多くの卒業生を輩出しており、また自律的かつ継続性の高い運営体制を構築している点などが高く評価され、地球工学科国際コースに業績部門の工学教育賞が授与された。

### ○特別講演 I

文部科学省高等教育局専門教育課長の松本英登氏からは「我が国の高等教育の現状等について」、経済産業省イノベーション・環境局大学連携推進室長の川上悟史氏からは「科学とビジネスの近接化—時代における理工系人材の活躍に向けて—」、京都大学国際高等教育院長の大嶋正裕氏からは「総合知のもとでの専門教育と教養教育のせめぎ合い—現代工学教育における教養教育の意義と課題」と題する特別講演があった。工学教育に関する国の動向や期待および京都大学における初年次教育の課題と取り組みが紹介された。

### ○交流会

初日の夕刻には交流会を開催した。100名近くの参

加者が集い、飲食とともに工学教育に関する交流を楽しみ、盛会となった。

### ○特別講演 II

アメリカ工学教育協会会長の Christi Patton Luks 氏からは「Shared Challenges and Collective Resilience in Global Engineering Education」、韓国工学教育学会国際連携担当理事の Younghoon Park 氏からは「The Introduction to KSEE and Recent Trends in Engineering Education in Korea」、マレーシア工学教育協会会長の Nurzal Effiyana binti Ghazali 氏からは「An Introduction to SEEM & Recent Trends in Engineering Education in Malaysia」と題する特別講演があった。各国における工学教育の最近の動向が紹介された。

### ○教育力向上セッション

セッション演題を「技術者教育力の進化—生成 AI の活用—」として、豊橋技術科学大学教授の市坪誠氏からは「教育士制度の普及拡大に向けて」、一関工業高等専門学校校長の小林淳哉氏と日本大学特任教授の青木義男氏からは「技術者教育力の進化（生成 AI を活用した教育力の向上を事例として）」の題目で講演があった。

### ○特別企画

関西工学教育協会の企画として工学部長・学長等会議を開催した。企画の具体化は本大会実行委員で京都大学工学研究科副研究科長・教授の小椋大輔氏により行われ、企画テーマを「“惹かれる工学”とは何か？—未来を担う多様な選択肢としての工学を考える—」とした。最初に八大学工学系連合会会長／九州大学工学研究院長・工学部長・教授の山本元司氏から「理工系女性人材が増えるために—工学系の現状と八大学の取り組み—」の題目で、国内の理工学系への女子学生の進学動向や八大学による取り組みに関する講演が

あった。続いて、京都大学工学研究科教授の平田晃久氏、平山朋子氏、京都大学防災研究所特定教授の土佐尚子氏から、それぞれ建築系、機械系、芸術系の各分野における魅力と女性人材に期待する将来が語られ、引き続き小椋大輔氏の進行により「女性にとって“惹かれる工学”とは何か－技術の魅力をどう育て、伝えるか」のテーマでパネル討論を行った。



山本元司八大学工学系連合会会長 / 九州大学工学研究院長の講演の様子

#### ○シンポジウム

関西工学教育協会の企画として、関西工学教育協会と日本工学アカデミー関西支部の共催でシンポジウムを開催した。企画の具体化は本大会副実行委員長で京都大学工学研究科副研究科長・教授の横峯健彦氏により行われ、シンポジウムテーマを本大会の主テーマを踏まえて「総合知を育む工学教育“ものづくりを通じた「総合知」の育成」とした。シンポジウムでは日本工学アカデミー関西支部長 / 大阪大学理事・副学長



シンポジウムの様子

の田中敏宏氏による開会挨拶の後、横峯健彦氏による企画趣旨説明があった。続いて、本大会実行委員長で京都大学工学研究科副研究科長・教授の蓮尾昌裕によるモデレーションのもと、パナソニック HD 名誉技監 / ESL 研究所所長の大嶋光昭氏、奈良工業高等専門学校校長の近藤科江氏、大阪大学工学研究科教授の倉敷哲生氏、京都大学工学研究科教授の高橋良和氏、京都大学情報学研究科教授の谷口忠大氏をメンバーとするパネルディスカッションが行われ、会場を巻き込んだ活発な討論となった。

#### ○一般講演

3日間の開催期間にわたって、222件の講演発表があり、ポスターセッション、録画発表も実施された。一般セッションでは、「多様化時代の教育手法とそのシステム」、「グローバルスタンダードに対応した教育システム」、「実験・実技を通じたエンジニアリング・デザイン教育の実践方法とその教材開発」、「地域社会に貢献する学生活動」、「AI・データサイエンスおよび Society 5.0 に対応した教育システム」、「講義・演習形式によるリベラルアーツ教育方法とその教材開発」、「学生セッション」、「産業界が求めるコミュニケーション能力の育成方法」、「高等教育とウェルビーイング」、「Society 5.0 時代を担う理工系人材育成に関する高専教育の実践と展開～高専における取組～」、「工学教育・システムの個性化・活性化」、「工学女子を育成する様々な取り組み」、「ものづくりの技能科学」、「理工系人材育成に関する高専教育の実践と展開」、「インターンシップ教育、企業×大学」、「高大院連携、社会・地域貢献、社会人教育、企業における技術者教育」、「アントレプレナーシップ教育」、「ICT を活用した教育システム」のセッションテーマで講演があり、工学教育に関する様々な研究が報告された。各セッションにおいて、問題解決型の教育システムに関係するテーマや急激に発展している生成 AI、機械学習、ICT に直接的もしくは間接的に関係する発表が比較的多かった。

大会を通して、対面ならではの活発な討議が行われた。

#### ○閉会式

最終日に行われた上記シンポジウムの終了後に同会場にて行われ、立川大会委員長による閉会の辞が述べられて閉会式が終了した。

#### 振り返って

私たちは日常、工学教育を行ってはいるものの工学教育を研究するという視点で捉えることはあまりなかったと思う。今回、日本工学教育協会の活動を知り、本大会の開催に携わることができたことは、とても貴重な経験であった。工学教育活動で何らかの工夫や新しい取り組みを行い、その効果を評価・検証することは、工学教育に関する研究そのものである。是非、皆様もそのような視点で活動の幅を広げていただければと思う。

最後となったが、日本工学教育協会事務局の皆様には、前回大会の引継ぎから本大会の終了までの様々な場面で貴重な指導・アドバイスをいただいた。総務課/関西工学教育協会事務局の皆様には、準備から大会実施までのロジスティクスを完璧に進めていただいた。実行委員会および学生アルバイトの皆様には、大会期間中の円滑な運営を担っていただいた。関係する皆様に心より感謝を述べる。



## 2025 年度八大学工学部長会議・八大学工学関連研究科長等会議を開催しました

令和7年9月26日（金）2025年度八大学工学部長会議・八大学工学関連研究科長等会議（八大学工学系連合会 秋の常設会議）を、ホテルオークラ京都4階「レイ」「暁雲」を会場として開催しました。

八大学工学系連合会は、北海道大学，東北大学，東京大学，東京科学大学，名古屋大学，京都大学，大阪大学及び九州大学に所属する工学系の学部・研究科等が協力・共同して，教育・研究・運営のあり方等について継続的な議論を通して，諸議題の解決と改善の意思を共有するとともに，産官学の直接的な対話を促進し，対外的な意見や要望を発信することをもって，会員大学ひいては我が国における工学教育，学術研究，科学技術等の発展に寄与することを目的としています。

### 《プログラム》

1. 八大学工学部長会議
2. 八大学工学関連研究科長等会議
  - ・ 講演 1  
「京都大学における光量子科学と博士人材育成」  
竹内 繁樹（電子工学専攻 教授）  
現：電気電子デジタル理工学専攻
  - ・ 講演 2  
「Do you have Joy and Fun in your own study?」  
野崎 治子（京都大学 理事）
3. 情報交換会  
(桂地区（工学研究科）総務課)



竹内繁樹氏の講演の様子



野崎治子氏の講演の様子



集合写真

## 「次世代研究者産学連携ネットワークイベント：産学共創で描くレジリエントな社会」開催報告 ー テクノサイエンスヒル桂構想に関わる取組み（令和7年度の活動成果） ー

総合研究推進本部 研究プロモート部門 リサーチ・アドミニストレーター 山崎 有香

京都大学桂キャンパスでは、イノベーション創出基盤の創成や産学連携ネットワークの構築の基盤となる「テクノサイエンスヒル桂構想」の実現に向け、工学研究科を中心に桂図書館やURAが連携し、研究シーズの可視化・発信するための各種取組み<sup>1~5)</sup>を展開しています。

上記取組み推進の一環として、総合研究推進本部(KURA)は、工学研究科と連携して関西イノベーションイニシアティブ(KSII)との共催で、令和4年からこれまでに、企業・大学の理工系女性研究者や次世代研究者による産学連携ネットワークイベント「桂ジェネ」<sup>1)</sup>「Meジェネ<sup>2)</sup>」「Fostering桂」<sup>3)</sup>「Transform桂」<sup>4)</sup>「BX桂<sup>5)</sup>」「Resilience桂」を開催してきました。

これまでの「桂の庭」関係の取組みにおける工学研究科・次世代学際院(iRING)との連携を更に強化するため、工学研究科と相談し、令和7年度からはiRING所属の先生方にもイベントの企画段階から加わっていただきより深く連携して取り組みました。イベントの開催趣旨は、次世代研究者に相互議論の場を提供し、産学ネットワーク構築や人材育成を図ることとしています。更に、従来の基礎研究に重きを置いたイベントに加えてより社会実装を見据えた連携の必要性を感じ、これまで年に2回開催してきた産学連携ネットワークイベント(桂イベント)を1回とし、もう1回は産学界との直接的なコミュニケーションを通じて、連携のきっかけを作る場を提供することにしました。

1回目のイベントとしては、KSIIにも企画に加わって貰い、研究者に「気づき」と共に産業界との距離感短縮を図るためのネットワークイベント「産学共創で描くレジリエントな社会<sup>4)</sup>」を企画しました。開催場所も桂キャンパスを離れ、昨年9月にアイデアやイノベーションを生み出すための共創拠点としてオープンした、グラングリーン大阪JAM BASEにて開催しました。新

施設のツアー後に、本学の研究者とスタートアップや研究シーズとの連携に関心が高い企業(大手ゼネコン・インフラ関連企業など10社)から19名の開発・技術部門の方に参集いただき、「レジリエント/災害対策」に関するテーマで研究発表およびワークショップを行いました。研究発表(画像1)では、工学研究科の都市社会工学専攻・社会基盤工学専攻、工学基盤教育研究センター、および防災研究所からそれぞれ1名の計4名の若手の先生方に講演いただきました。工学研究科 石塚師也講師から「合成開口レーダーの観測・解析技術の高度化によるシームレスな地表変動推定」について、岩井裕正准教授からは「防災・地球環境問題と“海底地盤工学”の関わり～海底地盤を聴く・見る・触る～」について、植村佳大助教からは「不確実性を考慮した構造物の地震応答評価のためのハイブリッドシミュレーション技術の高度化」についてご講演頂きました。また、防災研究所 田中智大准教授からは「気候変動による水災害リスクへの影響評価と適応」についてご紹介いただきました。その後の4つのセッションに分かれてのワークショップ(ディスカッション)(画像2)では、前述の講演に関する技術的な内容等に関



(画像1) 研究発表の様子

して企業側のリアルなニーズと研究者のシーズがぶつかり合い、登壇の先生方からは、『異なる分野の知識や視点からのコメントや社会実装に向けた企業側のニーズなど学会などでは得られない「気づき」が得られた』との感想を頂きました。更にイベント後に実施した参加企業へのアンケートでは、研究者との意見交換や技術相談を希望される企業もあり、また次年度もこのような企画を希望するとの声も寄せられました。

2回目のイベントとしては、テーマ策定の段階からiRINGの先生方と「2050年の目指すべき姿」について議論を重ね、持続可能な未来への鍵となる『炭素循環』を選定し、登壇者には、本学および京大発スタートアップ企業から、炭素循環社会の実現を加速する革新的技術を有する研究者を各3名づつ招聘。企業からは、昨年11月に「KPMG Global Tech Innovation」世界大会で優勝された、ライノフラックス株式会社の間澤敦CEOをはじめ、株式会社OOYOOのRalph Nicolai Nasara CTOおよびSymbiobe株式会社のGeoffrey Liou CTOに、また本学工学研究科からは小林和弥助教（社会基盤工学専攻）、村中陽介助教（化学理工学専攻）、鈴木肇助教（化学理工学専攻）にご登壇いただくよう企画しました。また、イベント名としてはCO2を回収・濃縮しカーボンリサイクル技術により再資源化・利活用する炭素循環の意味合いやXを頭に持ってくることで未知・未解決的な意味合いを込めて



(画像2) ワークショップ（ディスカッション）の様子

「CO2 Xcycle 桂<sup>5)</sup>」としました。企画にあたって学術的な深みと産業界のニーズをいかに高い次元で融合させるかに苦労いたしましたが、密度の濃い共創の場を提供することが出来ました。

本イベントシリーズは、最新の政策や技術動向に即した議論の場を創出することで、産学ネットワーク構築の深化と次世代人材の育成に寄与することを目指しています。今後も産学が一体となって未来を構想するための基盤を提供し、社会の発展に貢献してまいります。

参照：

1) 令和5（2023）年度 京都大学図書館機構長賞「桂図書館における学術研究支援機能の展開「桂の庭～京都大学桂図書館研究シーズ・カタログ」：研究の展開をサポートする新しい試み」桂図書館  
(<https://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/about/1398532>)



2) 京都大学工学広報 No. 81（2024.4）  
「京都大学女性研究者産学連携ネットワークイベント：Meジェネ」開催報告ーテクノサイエンスヒル桂構想に関わる取組み（令和5年度の活動成果）ー  
学術研究展開センター リサーチ・アドミニストレーター 下郡 三紀  
(<https://www.t.kyoto-u.ac.jp/publicity/no81/news/yqq81h>)



3) 京都大学工学広報 No. 83（2025.4）  
「京都大学次世代研究者産学連携ネットワークイベント：BX桂」開催報告ーテクノサイエンスヒル桂構想に関わる取組み（令和6年度の活動成果）ー  
学術研究展開センター リサーチ・アドミニストレーター 下郡 三紀  
(<https://www.t.kyoto-u.ac.jp/publicity/no83/news/r5scq6>)



4) 「京都大学大学院工学研究科・KSII 連携イベント：産学共創で描くレジリエントな社会」  
(<https://www.research.kyoto-u.ac.jp/blog/act20251023/>)



5) 「京都大学 次世代研究者 産学連携ネットワークイベント：CO2 Xcycle 桂」  
(<https://www.rac.t.kyoto-u.ac.jp/ja/news-events/events/ind-day2025co2xcyclekatsura>)



## 工学における国際交流の推進

附属工学基盤教育研究センター 副センター長 教授 本 多 充

附属工学基盤教育研究センター（以下、ERセンター）の重要なミッションである国際化推進の一環として、学生交流協定校であるフロリダ大学（以下、UF）から教員および多くの学生を受け入れているほか、京都大学の留学生と日本人学生の交流を促進する支援事業を展開しています。本稿では、2025年度のUF交流事業および留学生・日本人学生交流促進事業について紹介します。なお、UF交流事業のこれまでの経緯は、工学広報 No. 83 をご参照ください。

参照：

工学広報 No. 83

<https://www.t.kyoto-u.ac.jp/publicity/no83/news/yqq81h>



学研究科の学生が半数程度を占めるものの、残り半数は他学部・他研究科からとなり、幅広い分野の学生を呼び込むことができました。また、今年度は国際高等教育院主催の京都大学短期派遣プログラム（UF サマープログラム）として8月31日から9月15日まで京大生10名をUFへ派遣しました。このように、本事業は受入れのみならず、双方向型の交流へと着実に深化しつつあります。

参照：

フロリダ大学への短期派遣プログラムを実施しました

<https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/news/2025-09-29-2>



2025年度は、UF学生の受入れ回数を年2回へと拡大し、滞在期間も延長しました。第一回（5月12日～7月31日）は教員2名、TA2名、学生39名を、第二回（9月22日～12月10日）は教員2名、TA1名、学生28名を、それぞれ桂キャンパスと吉田キャンパスに迎えました。UF学生には短期交流学生の身分を付与し、桂図書館をはじめとする本学の諸施設を利用する学習環境を提供しました。特に第一回の受入れにおいては、数名のUF学生が複数の工学の研究室に所属し、ゼミへの参加や研究活動に従事するなど、将来の京大への留学も見据えた多角的な交流事業を実施しました。受入れをご快諾いただいた各研究室の先生方に、御礼申し上げます。

今年度より本事業に国際高等教育院が参画したこともあり、京大生も参加可能なUFが提供する講義を吉田キャンパスで実施しました。昨年度は桂キャンパスでの実施であり参加する学生数が限られていたという課題がありましたが、吉田キャンパスで実施したこともあって参加人数は大幅に増加しました。工学部・工

続いて、ERセンター国際化推進部門の海外留学生支援として取り組んでいる「ランチネットワーキング」の活動を紹介します。2024年度に始動した本活動は、「留学生の友人が欲しい」「海外に興味はあるが、一歩が踏み出せない」「英語は苦手だけれど挑戦してみたい」といった気持ちを持つ日本人学生と、京大に在学中の留学生との交流の架け橋となればとの思いから始まりました。2025年度はUF学生の受入れにあわせる形で前期の4～7月の間、毎週木曜に開催しました。参加学生から大変好評を博し、通年開催を希望する声も多く寄せられたことから、今年度は前期（4～7月）に加え、後期（10～12月）も実施する運びとなりました。今年度前期は船井国際連携ホールを会場とし、阿波おどりや折り紙、浴衣の着付けなど日本文化の体験を通じてUF短期交流学生と本学日本人学生・留学生が親睦を深めました。実施にあたっては、日本人学生が大きな役割を果たしてくれました。また、後期は桂ラウンジへと会場を移し、UF学生が主体となって企画したミニゲームなどを通じて、京大生たちとの交流が活発に行われました。

近年の世界情勢や経済状況を鑑みると、留学という選択が容易ではない学生が増えていると感じます。幸いにして、京大には短期留学生を含む多くの留学生が在籍しており、留学生との研究・文化両面での対話や交流は、海外で活躍できる人材育成の大きな一助となるはずです。特に、短期交流学生として滞在する30-40名のUF学生との交流は貴重です。ネイティブスピーカーの輪の中に飛び込む経験は、京大生にとって大きな自信に繋がっています。また、こうした交流を通じて、本学大学院への進学に興味を持つUF学生が現れるなど、双方向の教育効果も見受けられました。本事業へのご理解とご協力をどうぞよろしくお願いいたします。



ランチネットワーキングにおける交流の様子



ランチネットワーキング後の集合写真

## 桂図書館, 工学北図書室・工学南図書室 令和7年度活動報告

桂図書館は桂キャンパスで活動する工学研究科の大学院生・研究者のみなさん, 工学北・工学南図書室は吉田キャンパスで学ぶ工学部の学生のみなさんへ図書館サービスを提供するとともに, 図書館機構の一員として京都大学全学に資する活動を行っています。

令和7年度の主な活動についてご報告します。

### 1. 桂図書館における学術情報発信, 研究・教育交流活動

開架閲覧室では, 年間を通して「桂の庭 ~ 京都大学桂図書館 研究シーズ・カタログ」の展示で工学研究科・工学部の研究者の研究を紹介するとともに, 所蔵資料のテーマ展示や授業成果展示等を行っています。令和7年度は, 上記の展示に加え, 京都大学理事・副学長・特別教授 北川進先生のノーベル化学賞受賞記念展示やオープンアクセスウィーク関連等の展示を実施しました。

また, 昨年度に引き続き, 学内の技術研修や論文公聴会, ポスター交流会, 国際シンポジウム等, 約40

件の様々なイベントを実施しました。10月に開催されたiRING Teall3セミナー「研究の武器を共有しようの会」では, 多数のポスター発表や活発な意見交換が行われました。また, 夏休み期間には, 京都府内だけでなく滋賀県, 大阪府, 福岡県等の高校からも多くの見学者が訪れました。

さらに, 研究者間の交流を活性化させ, 学生の知的活動を促すとともに, 学外研究者との協働を促進する場として, リサーチコモンズ及びオープンラボの貸切での利用予約を受け付けています。グループワークやディスカッションに自由に利用することができるだけでなく, 事前に予約することで, 学会やポスター展示の会場として貸切で利用することも可能です。桂キャンパスでイベントを開催される場合は, リサーチコモンズ, オープンラボを会場としてご検討ください。



京都大学理事・副学長・特別教授 北川進先生ノーベル化学賞受賞記念展示 (2025/10/10 ~ 2025/12/25)



オープンアクセスウィーク関連展示 (2025/10/20 ~ 2025/10/31)



タイ人材育成プログラム One District One Scholarship によるタイ高校生訪問 (2025/10/15)

また、メディアクリエーションルームでは、研究・学習用コンテンツ制作支援として、併設のスタジオでの動画撮影・編集やグラフィック作成等のお手伝い、機器の貸出も行っています。e-Learning教材作成、授業や研究、業務紹介動画の作成、イベント撮影・配信等に、積極にご活用ください。

「桂の庭 ～京都大学桂図書館 研究シーズ・カタログ」  
<https://seeds.t.kyoto-u.ac.jp/>



桂図書館 オープンラボ・リサーチcommonsの利用  
[https://www.t.kyoto-u.ac.jp/lib/ja/katsura\\_library/commons/index.html](https://www.t.kyoto-u.ac.jp/lib/ja/katsura_library/commons/index.html)



桂図書館 メディアクリエーションルームの利用  
[https://www.t.kyoto-u.ac.jp/lib/ja/katsura\\_library/media](https://www.t.kyoto-u.ac.jp/lib/ja/katsura_library/media)



iRING Teal13 セミナー「研究の武器を共有しようの会」ポスター発表 (2025/10/8)



リサーチcommonsにおける職員向け講習会 (2025/12/8)

## 2. 図書館機構オープンサイエンス推進活動への参加

エリア連携図書館である桂図書館は、附属図書館、同じくエリア連携図書館である吉田南総合図書館、全学の部局図書館・室と連携して、図書館機構が進めるオープンサイエンス推進活動を行っています。桂図書館は、支援体制の構築や出版社ポリシーの調査、京都大学学術情報リポジトリ KURENAI への研究成果登録等において、全学図書館機能と工学研究科・工学部の専門図書館機能の双方を果たしています。

令和6年2月16日の統合イノベーション戦略推進会議において「学術論文等の即時オープンアクセスの実現に向けた基本方針」が策定され、公的資金のうち令和7年度から新たに公募を行う競争的研究費の受給者は、学術論文及び根拠データの学術雑誌への掲載後、即時に機関リポジトリ等の情報基盤へ掲載（即時オープンアクセス）することが義務付けられました。桂図書館では、即時オープンアクセスへの対応や、その他オープンアクセスに関する相談を受け付けていますので、気軽にお問い合わせください。

桂図書館 お問い合わせ  
<https://www.t.kyoto-u.ac.jp/lib/ja/contact>



(参考)  
【図書館機構】国のOA基本方針および研究データ関連の研究支援サービスのお知らせ  
<https://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/bulletin/1402597>



## 3. 桂図書館・工学北図書室・工学南図書室協働による教育支援・研究者育成支援

教育支援・研究者育成支援の取り組みとして、工学部1回生を対象とした授業において図書館・室職員が講師として参加し、図書館の活用方法等について解説しています。取り組みが開始された平成25年度以降、学術情報環境はますます多様化しており、情報リテラシーの重要度は高まっています。

桂図書館・工学北図書室・工学南図書室のウェブサイトでは、学生・研究者のみなさんに是非知っておいていただきたい学習・研究活動のフローに沿ったさまざまな

コンテンツを、対象レベル別に提供していますので、積極的にご活用ください。また、学生のみなさんを対象に、先輩方の臨場感あふれるアドバイスや失敗談が掲載されたリーフレットや、テーマに沿ったブックガイド、工学部学生に特化した図書館の利用方法等を桂図書館ホームページに掲載しておりますので、ぜひご活用ください。

工学北図書室・工学南図書室のラーニングcommonsについては、全学の学生が予約不要で日常的に使用



工学部地球工学科の英語授業 Practice of Basic Informatics での図書館職員による情報リテラシー講義

できるスペースとなっています。また、申請により授業等での学生のグループワークやプレゼンテーション、学部や学科が主催する公式行事等の目的で貸切での利用も可能です。令和7年度は、全学共通科目「情報と社会」のグループワークや、電気電子工学科の交流会等で利用されました。利用を希望される方は、工学北図書室・工学南図書室にご相談ください。

桂図書館 | 大学院工学研究科・工学部図書室 > 学習・研究サポート > ガイダンス & Tips  
<https://www.t.kyoto-u.ac.jp/lib/ja/support/tips/index.html>



工学北/南図書室 ラーニングcommonsの利用  
[https://www.t.kyoto-u.ac.jp/lib/ja/yoshida\\_libraries/learning\\_commons](https://www.t.kyoto-u.ac.jp/lib/ja/yoshida_libraries/learning_commons)



(桂地区 (工学研究科) 総務課)

## 卒論・大学院進学に向けて 今、できること・・・

レポートや論文の書き方がいまわからぬ。

大学院って、どんなところ？

そんな悩みや疑問を抱える**学部生の皆さんへ**、  
工学研究科大学院の**先輩からのメッセージ**を3回に渡ってお届けします。  
院生の皆さんの声のなかにきっと**ヒント**があるはず。  
ぜひ耳を傾けてみてください。

1. 学生生活編

2. レポート・論文編

3. プレゼン編

※文系のMは修士課程、Dは博士課程の意 (例:M1=修士1回生)

---

Q1 院に進学するまでに、専攻の知識の習得の他にもっと勉強しておけばよかったこと、身につけておけば良かったスキルなどはありますか？

- 語学力。 [地球系・M2]
- 文章をまとめる力。伝わりやすい日本語の書き方。 [電気系・M1]
- 英語力を高めることをしておけばよかったと考えます。研究室では英語論文を読むことが日常であるほか、外国の先生や先輩方と英語でディスカッションする機会もあるため、読む、話す、聞くというオールマイティな英語力が求められます。 [化学系・M1]
- 英語力とプログラミング能力があれば良かったと思います。先行研究を読んで知識を取り込み、自分の成果を論文や学会発表という形で発信するという一連の流れの中で、英語をかなりの頻度で使用します。また、プログラミングの基礎的な素養があれば、シミュレーションを回したり、データ解析が自動化したりと、研究がもっとスムーズに進んだ場面が多かったと思います。 [電気系・D1]
- 海外での経験。レポート・論文の書き方。物理の基礎となる数学の諸概念についての理解。 [物理系・M2]
- 英語の中でも特に実用的な、Listening力とSpeaking力、PCに関する知識(情報処理の仕組みやPCの性能など)、プログラミング能力、留学生など外国人との交流機会(できれば海外での経験)、LaTeXでのレポート作成やPPT資料作りの練習・効率化、将来自分が心から携わりたい研究分野や仕事を絞るための調査や経験、筋トレ・体力向上のためのランニング。 [物理系・M2]
- 語学力と言語力(必要最低限の言葉で伝えたいことを誤解なく伝えるスキル)、文献管理ソフトや各種ショートカットなど、研究以外の時間を減らすツールの存在を知っておくこと(とにかく時間が無いので)。 [化学系・M1]
- プログラミングやIT能力。 [建築系・M1]

「ツールとしての英語力が重要になってくるんだね。『Book Guide』(6ページ)で英語力習得に役立つ図書を紹介しているよ。」

発行:桂図書館|工学北・工学南図書室  
090stoshoh@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp  
発行日:2022年11月1日 更新日:2025年3月1日

本誌は桂図書館|工学部図書室ウェブサイト、「工学部生リテラシーとは?」ページからもご覧いただけます。

リーフレット：卒論・大学院進学に向けて今できること～先輩からのメッセージ～ 1. 学生生活編

## 卒論・大学院進学に向けて 今、できること・・・

レポートや論文の書き方がいまわからぬ。

大学院って、どんなところ？

そんな悩みや疑問を抱える**学部生の皆さんへ**、  
工学研究科大学院の**先輩からのメッセージ**を3回に渡ってお届けします。  
院生の皆さんの声のなかにきっと**ヒント**があるはず。  
ぜひ耳を傾けてみてください。

1. 学生生活編

2. レポート・論文編

3. プレゼン編

※文系のMは修士課程、Dは博士課程の意 (例:M1=修士1回生)

---

Q1 レポート・論文の書き方はどのように身につけましたか？

- 素敵な文献を参考にする。 [地球系・M2]
- 定期的な研究室内で開催される研究会で、作成した資料を先輩に添削してもらった。 [電気系・M1]
- 過去の先輩のレポートを参考にしながら、書き方を学んでいます。また、先生や先輩方のチェックをもらうことで改善につなげています。 [化学系・M1]
- 学部時代はほとんど自己流で書いていて、研究室に入ってから先輩の書き方の指導を受けました。学部時代の自分のレポートを今見返すと、なかなかいいと思うことも多いので、文章の書き方についての本を1冊読めばよかったと思っています。 [電気系・D1]
- 書き方の本を少し読んだことはあるが、なんとなく書いてしまっていた面が強く、反省している(卒論に関しては、構成から執筆のポイントまで、本をしっかり読んで参考にした)。 [物理系・M2]

「自己流では難しそう…。『Book Guide』(6ページ)で、レポート・論文の執筆に役立つ図書を紹介しているので参考にしてくださいね。」

発行:桂図書館|工学北・工学南図書室  
090stoshoh@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp  
発行日:2022年11月1日 更新日:2025年3月1日

本誌は桂図書館|工学部図書室ウェブサイト、「工学部生リテラシーとは?」ページからもご覧いただけます。

リーフレット：卒論・大学院進学に向けて今できること～先輩からのメッセージ～ 2. レポート・論文編

## 第 21 回工学部教育シンポジウム

令和7年11月21日(金)に「工学部教育シンポジウム」を開催しました。

第21回目となる今回は、「教えるために学ぶ工学教育」をテーマに、桂キャンパスBクラスター桂図書館2階リサーチコモンズにおける対面及びZoomによるオンラインのハイブリッド開催としました。

当日は、横峯健彦 教授（工学研究科副研究科長）による進行の下、立川康人 工学部長による開会挨拶から始まり、二部構成のプログラムを実施しました。教職員約230名の参加があり、予定時間を過ぎて盛会のうちに終了しました。

本シンポジウムは、工学部のFD活動として2005年から年1回開催しており、今後も継続して実施することとしています。



立川工学部長による開会挨拶

### 《プログラム》

〈第一部：講演会 今、教員に求められること。(講演)〉

・「教育現場での研究公正等の啓発について」

(蓮尾昌裕 教授 (物理工学科))

・「これからのリーダーシップのあり方を考える

ーリーダーシップ研修を受講して」

(平山朋子 教授 (物理工学科))

〈第二部：パネルディスカッション「教育現場での有効な取り組みとは」〉

・テーマ1：研究公正教育

・テーマ2：リーダーシップ教育

・討論

司会：蓮尾昌裕 教授

(工学部教育制度委員会副委員長)

パネリスト：

立川康人 教授 (工学部長)

高橋良和 教授 (地球：社会基盤工学専攻)

金多 隆 教授 (建築：建築学専攻)

平山朋子 教授 (物理：機械理工学専攻)

浅野 卓 特定教授 (電気：電子工学専攻)

現：電気電子デジタル理工学専攻

梅野 健 教授 (情報：情報学研究科)

生越友樹 教授 (理工：合成・生物化学専攻)

現：化学理工学専攻

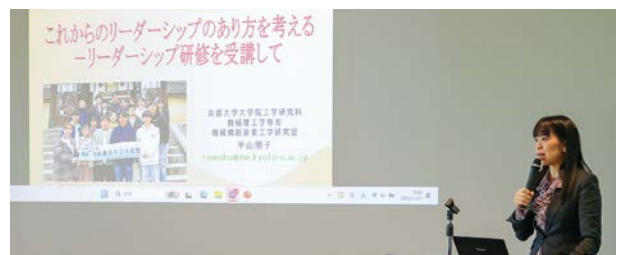
〈委員長総括〉

蓮尾昌裕 教授 (工学部教育制度委員会副委員長)

(桂地区 (工学研究科) 教務課)



第一部の様子 (蓮尾先生による講演)



平山先生による講演



第二部の様子 (パネリストによる討論)

## 令和7年度吉田卒業研究・論文賞



令和7年6月25日(水)桂キャンパスBクラスター事務管理棟3階桂ラウンジにおいて、「令和7年度吉田卒業研究・論文賞授与式」を挙行了しました。

吉田卒業研究・論文賞は、三和化工株式会社(本社:京都市南区,吉田典生 代表取締役社長)より、工学研究科の教育・研究の奨励を目的にいただいたご寄附を活用させていただき、平成27年度に創設された表彰制度です。

工学研究科では、京都大学工学部4回生時において優れた卒業研究を行い、工学研究科修士課程に進学した者を「吉田卒業研究・論文賞」として表彰するとともに、ご寄附を原資として副賞(5万円相当の図書カード)を贈呈しています。

第10回目となる令和7年度については、16名の修士課程1回生の学生が採択されました。

寄附者の吉田様ご夫妻をはじめ工学研究科関係者が臨席され、立川工学研究科長から受賞者ひとりひとりに表彰状と副賞が授与されました。また、立川工学研究科長より、受賞者に温かいお言葉が贈られました。

(桂地区(工学研究科)教務課)

### 令和7年度受賞者一覧

専攻	氏名
社会基盤工学	中谷美登理
都市社会学	鴨井泰人
都市環境工学	友井幹太
建築学	上原雄大
機械理工学	堤伊吹
マイクロエンジニアリング	瀧川蒼波
航空宇宙工学	坂田颯馬
原子核工学	内田義太郎
材料工学	富高龍
電気工学	SHI GUANGQI
電子工学	吉村思音
材料化学	山本勇生
物質エネルギー化学	岡本健佑
分子工学	奥田幸登
高分子化学	花浦有馬
化学工学	三井怜

参照:  
「令和7年度吉田卒業研究・論文賞授与式」を挙行了しました  
<https://www.t.kyoto-u.ac.jp/ja/news-events/news/adms/zimok0wjnhof>



## 令和7年度吉田研究奨励賞



令和7年6月25日(水)桂キャンパスBクラスター事務管理棟3階桂ラウンジにおいて「令和7年度工学研究科吉田研究奨励賞授与式」を挙りました。

吉田研究奨励賞は、三和化工株式会社(本社:京都市南区,吉田典生 代表取締役社長)より、工学研究科の教育・研究の奨励を目的にいただいたご寄附を活用させていただき、令和2年度に創設された表彰制度です。

工学研究科では、博士後期課程に在学する学生の中で、優れた資質をもつ学生の研究活動や実績を奨励し、「吉田研究奨励賞」として表彰し、ご寄附を原資として副賞50万円を贈呈しています。

第6回目となる今年度は、専攻より10名の推薦があり、選考の結果、以下3名の博士後期課程3回生の学生が受賞しました。

寄附者の吉田様ご夫妻をはじめ工学研究科関係者が臨席され、立川工学研究科長から受賞者ひとりひとりに表彰状と副賞として目録(50万円)が授与されました。

また、立川工学研究科長より、受賞者に温かいお言葉が贈られました。

続いて、各受賞者が吉田様への感謝の意と自身の研究内容ならびに副賞をどう活かすかについて述べました。

和やかな雰囲気の中、授与式は閉式となりました。

(桂地区(工学研究科)教務課)



吉田様ご夫妻とスピーチする学生の様子

### 令和7年度受賞者一覧

専攻	氏名
機械理工学	北 田 絢 也
材料工学	塩 谷 太 基
高分子化学	菅 野 陸 童

参照:  
「令和7年度吉田研究奨励賞授与式」を挙りました  
<https://www.t.kyoto-u.ac.jp/ja/news-events/news/adms/oeoqe4>



## 令和7年度工学研究科馬詰研究奨励賞



令和7年7月8日（火）、桂キャンパスBクラスター事務管理棟3階桂ラウンジにおいて「工学研究科馬詰研究奨励賞授与式」を挙行了しました。

馬詰研究奨励賞は、本学工学研究科を修了後、本学化学研究所において助手、講師として勤務され、その後民間企業でご活躍された故馬詰彰様のご遺族から工学研究科に寄附していただいたご遺産を活用させていただくために、平成23年度に設けられた奨学表彰制度です。

工学研究科では、博士後期課程に進学した学生の中で、研究業績・品格ともに優れ、かつ欧米先進国で海外研修等を行おうとする者を奨励・支援するために「工学研究科馬詰研究奨励賞」として表彰するとともに、ご寄附を原資として海外研修旅費を支給しています。

第15回目となる今年度は、以下14名の博士後期課程1回生の学生が受賞し、制度創設から現在までの受賞者は計217名となりました。

授与式には、来賓として故馬詰彰様のご親族、学内の工学研究科関係者が臨席され、立川工学研究科長から受賞者へ表彰状が授与されました。

また、馬詰洋一郎様ならびに立川研究科長より、受賞者に向けて、ご自身の経験談を踏まえた温かいお言葉が贈られました。

続いて、令和5年度受賞者である社会基盤工学専攻の上田知弥さんと高分子化学専攻の出垣大貴さんより、

馬詰様への感謝の意とともに、自身の研究内容ならびに海外研修での経験談について帰国報告がありました。

今年度の受賞者は、先輩達の経験談を熱心に聞き入っていました。

終始、和やかな雰囲気の中、授与式は閉式となりました。

（桂地区（工学研究科）教務課）

### 令和7年度受賞者一覧

専攻	氏名
社会基盤工学	松井春樹
都市社会工学	中辻綾香
機械理工学	河合真穂
マイクロエンジニアリング	西村太希
原子核工学	市川龍
材料工学	瀬川優祐
電気工学	片山夏樹
電子工学	利光汐音
材料化学	藤田航輝
物質エネルギー化学	小崎舜真
分子工学	岡島和希
高分子化学	荻原龍馬
合成・生物化学	宮田彩名
化学工学	小池貴誠

参照：  
「令和7年度工学研究科馬詰研究奨励賞授与式」を挙行了しました  
<https://www.t.kyoto-u.ac.jp/ja/news-events/news/adms/uzc69z>



## 令和7年度工学部公開講座・オープンセミナー開催報告

令和7年10月19日（日）に工学部公開講座・オープンセミナー「ひと・社会・工学—工学のいまを知る—」を開催しました。（351名参加，オンライン）

当日は、阪本卓也 副研究科長による進行の下、3名の教員による講演に引き続き、中学生・高校生・予備校生に加え、今年度からは保護者も対象に追加した質問会を実施しました。

### 【講演テーマ】

- ・ 街と地域を理解する人工知能  
（情報学科 竹内 孝 講師）
- ・ 分子環境を可視化できる高機能蛍光色素の開発と研究裏話  
（理工化学科 田中一生 教授）
- ・ プラスチックの橋をつくる  
（地球工学科 北根安雄 教授）

### 【質問会で話題となった事柄（例）】

- ・ 工学部の各学科の特色
- ・ 理学部と工学部の違い
- ・ 他大学にはない京大工学部の強み
- ・ 高校生活についてと力を入れた勉強科目
- ・ 工学部を選んだ理由と現在の分野を学ぶきっかけ
- ・ 電気電子工学科と情報学科の違い
- ・ 理学部と工学部（理工化学科）の違い
- ・ 研究テーマを思いつく方法、学生が身につけておくべき習慣

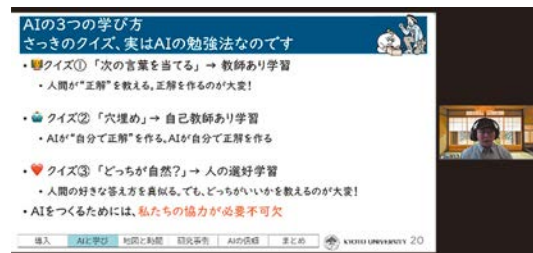
各講演の質疑応答、質問会ともに参加者から多くの質問があり、講演者との活発な対話を交えつつ盛会のうちに終了しました。

また、参加者アンケートでは「初めて参加したが、どの授業もとても興味深かった」「遠方のため、オンラインで参加できて有難い」等といった声が寄せられました。

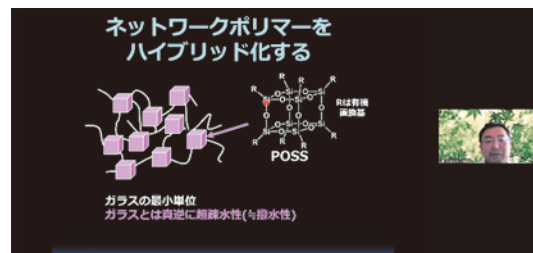
今後も継続して開催し、工学研究科における最近の研

究事例を広く一般市民へ伝えるとともに、京大工学への進学を志す方への情報提供の機会としたいと思います。

（桂地区（工学研究科）総務課）



竹内 孝 講師



田中一生 教授



北根安雄 教授



質問会の様子

参照：  
工学部公開講座・オープンセミナー  
<https://www.t.kyoto-u.ac.jp/ja/public/extension>



## 北川 進 理事・副学長，高等研究院特別教授 ノーベル化学賞受賞

本学理事・副学長 北川 進 先生が、令和7年10月8日、ノーベル化学賞を受賞されました。

この吉報に接し、受賞時の立川 康人 研究科長からのお祝いの言葉を掲載いたします。

本学理事・副学長 北川 進 先生が、ノーベル化学賞を受賞されるとの報に接しました。北川先生は本学工学部を卒業後、大学院工学研究科修士課程を経て、大学院工学研究科博士後期課程を修了され、昭和54年に京都大学工学博士の学位を授与されました。その後、近畿大学理工学部助教授、東京都立大学理学部教授を経て、平成10年6月に本学工学研究科教授に着任され、平成29年3月まで工学研究科・工学部において、多くの学生の教育と研究者の指導にあたり、人材を育成されました。平成19年10月からは京都大学物質—細胞統合システム拠点教授となられ、平成29年4月から現在まで、京都大学高等研究院特別教授として研究に取り組みながら、令和6年4月からは京都大学理事・副学長を務められ、大学運営にも貢献されています。

本学工学部と工学研究科で学ばれ、本学で教育研究に尽力されている北川先生が、このような栄誉を受けられましたことは、工学研究科・工学部にとりましても誠に大きな喜びです。京都大学工学研究科・工学部の教職員を代表して、心よりお祝い申し上げます。

北川先生は、世界に先駆けて多孔性配位高分子（Porous Coordination Polymer, PCP）の概念を提唱し、その合成に成功されました。PCPは金属イオンと有機配位子から構築される結晶性多孔体であり、国際的にはMetal-Organic Framework (MOF)として広く知られています。北川先生による「PCP」という呼称は、この分野を切り拓いた独創的業績を象徴するものです。これらの材料は、気体分子の可逆的な吸着・分離・貯蔵を可能とし、触媒、分離膜、エネルギー貯蔵など多様な応用展開が期待されています。

この偉大な功績をなされた北川先生を誇りに、工学研究科・工学部における教育研究に一層尽力して参ります。

（桂地区（工学研究科）総務課）



北川 進 理事・副学長，高等研究院特別教授



記者会見の様子



花束贈呈の様子

## Kyoto iUP 生へインタビュー Vol.12

Kyoto iUPとは、優秀な留学生の受入れ促進のため、入学段階では日本語能力を問わず、入学決定後に徹底した日本語教育を実施し、専門教育は日本人学生と共に日本語で受講する留学生向けのプログラムです。工学部には、2019年に第1期生が入学しました。



工学部物理工学科 2 回生  
UBANOS FILBERT  
JOSEPH AGUELO さん  
出身地 フィリピン

**Q. 留学先に京都大学を選ばれた理由は何でしょうか？**

A. 大学進学先を決めかねていたときに、通っていた高校で開かれた iUP プログラムの説明会に参加しました。入学してからの授業で日本語の勉強ができる点と、子供の頃からテレビで日本の番組を見ていて憧れがあったので、京都大学を選びました。私のときには京都大学の職員の方が紹介に来てくださっていたのですが、今では私が母校で iUP プログラムの説明会に参加しています。

**Q. 物理工学科で学ぼうと思ったきっかけは何でしょうか？  
また、物理工学を京都大学で学ぶ魅力は何だと思えますか？**

A. 物理と数学が得意だったので、工学部に向いていると思ったからです。その中でも物理工学科は様々なコースがあり、自分の知識をどの分野に活かせるか、まだ決められていなかったのが今後の選択肢の多い点に関心を持ちました。

京都大学の物理工学科で学ぶ魅力は、日本トップクラスの環境で学べることです。私は現在原子核工学コースに所属しているのですが、設備が充実していることに加えて、多様な学生や先生方と共に学ぶことができる機会が多く設けられていると感じています。

**Q. 京都大学の生活で印象に残っていることがあれば教えてください。**

A. 大学内に様々な部活動やサークルがあり、人間関係のスキルアップができることが一番魅力的だと感じています。私は現在京大合唱団に所属しているのですが、合唱のスタイルの一つであるバーバーストップ・スタイルを日々練習しています。

**Q. どんなところで一番苦労されていますか。**

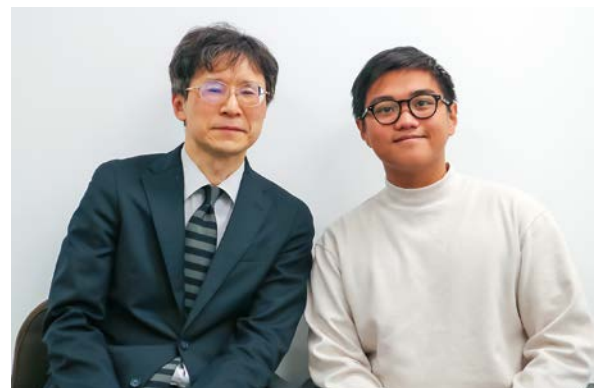
A. 日本語は京都大学に入学する前からオンラインで勉強していましたが、日本人の学生と話すときにはやはり緊張します。けれど、日本人の友人ができてからは、私達と同じように英語を話すときに緊張してうまく話せず悩んでいると知りました。みんな同じように努力していると思えたことが、自信につながりました。

**Q. 京都に来てからの気分転換やリフレッシュの方法は何でしょうか？**

A. 留学生の友人たちと話をしたり、お互いの郷土料理を教え合ったりしています。私は料理をするのが好きなので、友人たちに食事を振る舞うことも楽しいです。最近では、ベトナムの留学生から、パインセオというお好み焼きのような料理を教えてもらいましたが、とても美味しかったです。

**Q. 将来の夢を教えてください。**

A. 原子核というと、フィリピンでは原子力発電所での事故等から危険だというイメージを持つ人が多いように思います。しかし、私が研究したいと考えている原子核医療用加速器は、原子核にエネルギーを与えてビームを発射し、がん細胞を壊すことができます。こうした、原子核を使った安全で人の役に立つ技術を通じて、人々が原子核に持つイメージを変えていけるような研究をしたいです。



メンターである岡田幸典先生（国際高等教育院特定講師）と一緒に

参照：  
Kyoto iUP Web サイト <https://www.iup.kyoto-u.ac.jp/>



## 水素乱流燃焼特性の解明を目指して

九州大学大学院総合理工学研究院 甲斐玲央



私は、2016年度に京都大学工学部物理工学科機械システム学コースを卒業後、工学研究科機械理工学専攻に進学し、2022年3月に博士（工学）を取得しました。学部4回生の研究室配属後、博士号の取得ま

で黒瀬良一教授にご指導いただきました。また、在学中は研究室の合併もあり、黒瀬先生に加え、松本充弘先生、若林英信先生にもお世話になりました。現在は九州大学の総合理工学研究院 / 総合理工学府 / 工学部融合基礎工学科にて准教授を務めています。学部4回生から現在に至るまで、一貫して燃焼に関して、主に数値シミュレーションを用いて研究をしてきました。

大学院生時代を振り返ってみると、博士後期課程への進学を決めたことが現職にも繋がっており、人生の大きな転機でした。大学院入試を受けた当初は、進学を考えてもいませんでしたが、研究を行う中で、これまで未解明だったもの、できなかったことに対する課題を解決していく楽しさを知り、進学を決めました。時折、この楽しさを忘れそうになることもありますが、常に胸に留めておきたいと改めて思います。また、在学中は、国内外を問わず、学会、研究会に参加する機会を多くいただき、多くの研究者と知り合い、議論することが出来ました。この経験、繋がりは現在の研究活動にも生きており、黒瀬先生に感謝するとともに、自身も指導学生に様々な経験の場を与えられるような教員になりたいと考えています。

現在は、研究テーマの一つとして、水素燃焼器開発を念頭において、水素の乱流燃焼特性、特に乱流燃焼速度に関する研究を進めています。水素は燃焼時に二

酸化炭素を排出しないため、2050年カーボンニュートラルの実現に向けて、ガスタービンエンジン等の燃焼装置において、その燃焼利用が進められています。水素は従来の化石燃料等と比較すると、燃えやすく、燃焼速度が大きいという特徴があります。そのため、既存の燃焼装置において、単純に燃料を置き換えただけで利用することは難しく、新たに専用の燃焼器を開発する必要があります。

水素燃焼器の開発、特に予混合燃焼方式を採用した場合の課題の一つに「逆火の抑制」が挙げられます。逆火とは、火炎が流れに逆らい、意図せず上流に遡る現象であり、燃焼装置の破壊に繋がりが得る現象です。逆火は、燃焼速度が未燃ガスの流速を上回った際に起こる現象のため、燃焼速度と流れの制御が抑制の鍵となります。このうちの燃焼速度に着目して研究をしています。燃焼速度は、未燃ガス温度、当量比、圧力、火炎伸長等によっても変化しますが、特に希薄乱流水素火炎では、乱流、および水素の高い拡散性に起因する熱-拡散不安定性による火炎面積の増大も影響します。これらの影響は分離し難いものもありますが、燃焼速度の制御に向けて、それらの影響を整理すべく、これからも指導学生とともに、研究に励んでゆきます。

(機械理工学専攻 2022年3月博士課程修了)



## 原子から加工までを貫く材料変形研究

助教 宮澤直己



エネルギー科学研究科・エネルギー応用科学専攻資源エネルギープロセス学分野（浜研究室）で助教として、構造用金属材料の変形・加工に関する研究に従事しております。私は2019年3月に同研究科博士後期

課程を修了後、東京工業大学（現・東京科学大学）物質理工学院材料系で助教として勤務し、2023年3月より現所属に着任いたしました。学生時代から東京工業大学在籍時までは、主に分子動力学計算や第一原理計算を用いた数値解析に取り組んでまいりました。金属材料の変形は、転位・空孔・粒界といった格子欠陥の挙動が積み重なって現れる現象であり、私はその最も基礎的な階層に位置する原子スケールの機構に興味を持ち、その振る舞いを理解・再現するためのシミュレーション手法の構築と物理的解釈に努めてきました。

京都大学に戻ってからは、こうした原子レベルのモデリングに加えて、力学試験や電子顕微鏡観察などの実験的手法、さらには有限要素解析を用いたミリオーダーの変形・加工プロセス解析にも取り組み、研究の幅を大きく広げております。実験と計算、微視から巨視のスケールを往復することで、これまで個別には捉えきれなかった現象同士のつながりが見え、材料変形をより立体的に理解できるようになったと実感しています。また、もともと材料学を中心に研究を進めてきましたが、着任後は塑性加工学をはじめとする実用に直結する工学分野にも踏み込みました。いずれも「材料の変形」を対象とする点では共通しますが、材料工学と加工学ではものの見方やアプローチが異なります。両者を行き来することで、自身の視野が自然と拡

張され、これまで気づけなかった現象の背景や、分野横断的な価値観の違いにも改めて目を向けるようになりました。

研究を続ける中で、材料の世界が観察スケールによって全く異なる表情を見せることに改めて魅力を感じています。原子スケールでは一本の転位が一瞬にして走り抜け、微視組織ではその軌跡の蓄積が観察され、巨視的には一枚の板材が大きく成形される、こうした複数の景色をひとつながりの現象として理解するプロセスは、私にとって研究の面白さを再発見することに繋がっております。さらに、材料工学・機械工学・計算科学といった異なる分野・文化を横断すること自体が、新しい発見や着想につながることを日々感じています。

今後もこうしたスケール横断的・学際的な視点の広がりを活かし、「自分だからこそできる研究」の追求を続けてまいりたいと考えております。皆様方には今後ともご指導ご鞭撻を賜る場面があるかと存じますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。

（エネルギー科学研究科）



## 建築の設計と研究について

准教授 猪股圭佑



建築の設計と研究を行っています。2002年3月に京都大学工学部建築学科を卒業し、同年4月に修士課程に進学しました。研究室では西欧絵画に描かれた自然について研究しながら、いくつかの設計プロジェクトに関わり、当時計画が進められていた桂キャンパスの建物の模型製作なども行いました。修士課程修了後、2004年4月に東畑建築事務所に入所し、設計活動に従事することになりました。建築士がたくさんいる組織設計事務所だったので規模の大きな仕事が多く、警察署や市庁舎、オフィス、学校、刑務所など、様々な用途の建物の設計に携わり、貴重な経験を積むことができたと思います。

2012年4月から武庫川女子大学建築学科で講師として働くことになって研究活動を再開し、2018年にはビザンティン聖堂の研究で京都大学博士（工学）の学位を取得しました。武庫川女子大学では学生と一緒に駅や住宅、庭園などの設計プロジェクトに参画し、建築学部2つの新校舎の設計も担当しました。これらの新校舎は武庫川女子大学が学舎として活用している甲子園会館（旧甲子園ホテル）の特徴を現代的に再解釈した建築です。甲子園ホテルはF.L.ライトの弟子である遠藤新の設計で、タイルなどの豊かな装飾的材料の使用と近代的な空間構成が高く評価されていますが、この建物について学生と実測調査を行い、2022年にはその成果を兵庫県立美術館の展示会「甲子園会館に学ぶ／で学ぶ」において発表することができました。その後、2025年3月から京都大学工学研究科建築学専攻で勤務しています。

設計事務所を辞めて大学で働くことになってから、修士課程で行った研究を発展させて、ビザンティン聖堂の建築と壁画の研究を続けています。ビザンティン聖堂とは中世の東ローマ帝国のキリスト教聖堂のことで、建物内部に多くの壁画が描かれているのが特徴です。キリスト教絵画はそれぞれが独立した絵画空間としてその画面の中でキリストや聖母マリアの物語を表現していますが、全ての絵画は様々な図像の組み合わせであり、個々の図像がビザンティンの伝統にもとづいた宗教的意味を持っていて、それらの図像が合わさって一つの絵画を構成します。さらにビザンティン聖堂では、複数の壁画が関係し合うことにより、一つの壁画では示し得ない神学的意義を表現するとともに、壁画が建築とも関係づけられることによって神聖な空間をつくりだしています。この建築と壁画によって構成された空間は、時代によって変化し、過去に意味付けられた空間の上に新たな建築と壁画との関係性が重なって、より複雑な空間が形成されます。

ビザンティンの人々は建築と壁画によって宗教的な意味を表現し、聖なる空間を実現しました。機能が最優先される現代の建築設計においても、有意味な空間を創造することはできるのか、そんなことを考えています。

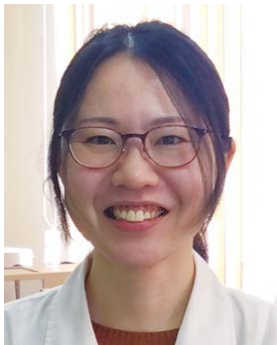
（建築学専攻）



オシオス・ルカス修道院聖堂  
アイソメトリック図

## 「なるほど！」の瞬間に立ち会うよろこび

技術主任 丸岡 恵理



工学研究科技術室の丸岡恵理です。大学生の頃から教育に関わる仕事に興味を持っており、10年ほど前に京都大学とのご縁を頂いて、工学部理工化学科の学生実験の運営に携わっています。

学生実験では120名の学生が1グループ40名ごとに分かれ、様々な専門実験を約2か月ごとにローテーションし受講します。私は、その1つである有機化学実験の運営業務を主に担当しており、学生の指導やサポートを行っています。有機化学実験の面白さ、楽しさを伝えるということを教員とTAとの共通の方針として取り組んでいます。分かりやすく伝えることや、一緒に考えることで学生の理解が深まり、前向きな反応を得られる点にやりがいを感じています。

学生実験では、理論だけでは得られない「体験的な理解」を深められるよう意識しています。座学で学んだ反応式を実際に自分の手で試してみることで、抽象的な知識が現実の現象として結びつく瞬間があります。その「なるほど！」という表情を間近で見るのが、私にとって何よりの喜びです。

座学では、「AとBを反応させるとCができる」というような原理を学びますが、実際に実験すると反応に使われなかった原料Aが残っていたり、副生成物Dができていたりします。得られた物質をそのまま分析装置で測定しても明瞭な結果が得られず、反応が上手く進行したのか判断ができません。純粋な生成物を合成できていると考えている学生達は、理論と現実の違いに直面します。そこで不純物を除去するために再結晶という温度による溶解度の差を利用した精製方法を

学ぶこととなります（小中学校のときに沢山のミョウバンをお湯に溶かした後、ゆっくりと冷ましてきれいな大きい結晶を作ったことがある方もいるのではないのでしょうか）。フラスコ中の液体に、透明で美しい結晶が次々と湧き出てくる様子を見て、学生は「きれいな結晶が沢山できてきた！」と嬉しそうに話してくれます。そのような姿を見て私もわくわくし、教える楽しさとやりがいを強く感じています。有機化学実験では、加熱、抽出、中和、洗浄、測定といった様々な基本操作が出てきます。一口に加熱といっても温度や昇温スピード、攪拌速度など気を付けるポイントは多く、自分の手で行うことで得られる気づきが沢山あります。そういった気づきを自分で観察し考えながら進めていく学生たちの背中を見守り、時にそっと後押ししています。

学生実験は、様々な分野に直に触れることのできる貴重な機会であり、研究の入口となる大切な科目です。私自身がわくわくを持ち続け「自分で考える面白さ」や「化学の楽しさ」をこれからも伝えていきたいと思っています。卒業した学生たちが活躍することを楽しみにしています。

（京都大学総合研究推進本部 兼 工学研究科技術室）



# 編集 後記

昨年（2025年）京都大学では大きなニュースが続きました。北川進理事・副学長，高等研究院特別教授がノーベル化学賞を受賞されました。京都大学全体としても，また教授を務められていた本研究科でもお祝いムードに湧きました。また昨年末には京都大学が国際卓越研究大学の認定候補に選定され，認定のために今後京都大学は大きな変革の波を進んでいくことになることになり，一事務職員ではありますが，少しずつ肌で感じている今日この頃です。京都大学全体としての変化と共に，工学研究科では，4月から鈴木基史研究科長が就任され，電気系，化学系の大学院各専攻がそれぞれ一専攻化し，電気電子デジタル理工学専攻，化学理工学専攻が新たに誕生します。変化の多い時期でもあり，本誌をご覧の皆様はお忙しい毎日を過ごされていることと思いますが，忙しい合間に，どうぞ一息ついてご覧いただければ幸いです。

工学広報 No.85 をお届けします。

本号巻頭言では，鈴木研究科長・工学部長から，これからの抱負を伺いました。また，立川前研究科長・工学部長には，3年間を振り返った思いを伺いました。

随想では，本年3月末に本学をご退職されました教授方のうち，乾晴行氏から，研究生活にまつわる思い出等を伺いました。

ニュースでは，大阪・関西万博出展報告，日本工学教育協会関西工学教育協会第73回年次大会開催報告，八大学工学関連研究科長等会議開催報告，テクノサイエンスヒル桂構想に関する活動，附属工学基盤教育研究センターの活動，桂図書館や工学北図書室・工学南図書室の活動，第21回工学部教育シンポジウム，令和7年度吉田卒業研究・論文賞，令和7年度吉田研究奨励賞，令和7年度工学研究科馬詰研究奨励賞，工学部公開講座・オープンセミナーについて報告いただき，Topicsとして北川進理事・副学長，高等研究院特別教授ノーベル化学賞受賞の記事を取り上げました。

紹介では，前号に引き続き，Kyoto iUP 生へのインタビューを掲載しています。本号では，物理工学科のUBANOS FILBERT JOSEPH AGUELO さんに志望動機や学生生活について伺いました。

また，卒業生紹介として，甲斐玲央氏から，学生生活の思い出等について，若手教員紹介として，宮澤直己氏，猪股圭佑氏から，現在取り組まれている研究のことや将来の抱負について，工学研究科技術室の丸岡恵理氏から，業務内容を伺いました。

ご多用にもかかわらず，原稿依頼をご快諾いただき，貴重な時間をさいてご執筆くださいました皆様に，厚く御礼申し上げます。



A クラスタープロムナード花壇のチューリップ



A クラスタープロムナード花壇のネモフィラ



石楠花からB クラスターをのぞむ

## 令和7年度 工学研究科・工学部広報委員会

委員長	立川康人 教授	委員	松本充弘 准教授
副委員長	阪本卓也 教授	委員	木本恒暢 教授
委員	日高平 准教授	委員	伊藤孝行 教授
委員	三浦研 教授	委員	関修平 教授



工学研究科・工学部広報委員会